

街の人々

一、都海

人々が泳いでいる。

すれ違い、浮遊。

高層ビルの隙間を縫って。

ぐるぐる回り、回遊。

深海のような都会のそこで、人がぞろぞろ泳いでいく。

まるで周りが真つ暗なように
ただ一人の世界を泳いでいく。

深い水底。

吐き出す言語はあぶくに変わる。

ぶくぶく不定形なあぶく。

ビー玉のように美しく取り繕う。

ふよふよ浮かび上がるあぶく。

ただひたすら生産されていく。

「最近では箱からもあぶくが出るらしいよ。」

深海で光る液晶があぶくを吐く。

淡くて脆弱な光が餌を呼ぶ。

自分はこちらだと人を呼ぶ。

「最近ではあぶくが見えにくくなっているんだよ。」

こぼこぼ。

ぶくぶく。

ふよふよ。

都会を泳ぐ人々が、ただぶくぶくと泡を吐く。

深いそこに住む人たちが見向きもせず泡を吹く。

無数のあぶくが世界を覆う。

歪なあぶくが天へと昇る。

ぶかぶか吐かれて。

ぶよぶよ膨れて。

ふわふわ離れて。

ぱちりと弾ける。

あぶくがいくら弾けても誰も天を仰ぎはしない。

あぶくがいくら震えても誰もそれに触れはしない。

あぶくがいくら吐かれても誰もそれに気づきはない。

ぶかぶか吐かれて。

ぶよぶよ膨れて。

ふわふわ離れて。

ぱちりと弾ける。

人々が泳いでいる。

すれ違い、浮遊。

高層ビルの隙間を縫って。

外国語学部
国際文化交流学科 3 年
伊藤 歩美

今日も口からあぶくを吐く。
誰かに向けてあぶくを飛ばす。
だけど誰も気づきはしない。
こぼり。

見つめる箱があぶくを吐く。

「そこじゃなくて空を見なよ。」

二、機怪

ロボットを作った。

大きなロボット。

でも大きすぎるわけじゃない。

丁度お父さんくらいの大きさ。

ロボットを作った。

人型ロボット。

鉄の温度は好きじゃない。

丁度お母さんくらいの温かさ。

ロボットはミスした。

危ないところによく突っ込む。

壊れるのはよろしくない。
いつもロボットをしかった。

ロボットは学んだ。

僕の言いつけをよく聞く。

無駄なことも一切しない。

僕はロボットを褒めた。

ロボットと遊んだ。

真面目なロボット。

彼はなんでもそつなくこなす。

僕は少しつまらない。

ロボットは名無しだ。

今さら僕はそれに気づいた。

何かに似ている顔を見つめる。

なぜかロボットはへらりと笑った。

ロボットが壊れた。

修理していた僕は気づいた。

コイツには個性がない。

コイツには意志がない。

なんて機械なんだろう。

僕は気づいた。

コイツは僕だ。
「なんて奇怪なんだろう。」